

## 四 信 五 品 抄

建治三年四月初旬 五六歳

青<sup>せい</sup>鳧<sup>ふ</sup>一<sup>ゆ</sup>結<sup>あわ</sup>ひ送<sup>あわ</sup>り給<sup>あわ</sup>び候<sup>あわ</sup>ひ了<sup>あわ</sup>んぬ。

近来の学者一同の御存知に云はく「在世滅後異なりと雖も、法華を修行するには必ず三学を具す。一を欠いても成ぜず」云云。余又年来此の義を存する処に、一代聖教は且く之を置く。法華經に入って此の義を見聞するに、序正の二段は且く之を置く。流通の一段は末法の明鏡、尤も依用と為すべし。而るに流通に於て二有り。一には所謂迹門の中の法師等の五品、二には所謂本門の中の分別功德の半品より經を終はるまでの十一品半なり。此の十一品半と五品と合はせて十六品半、此の中に末法に入って法華を修行する相貌分明なり。是に尚事行かざれば普賢經・涅槃經等を引き来たりて之を糺明せんに其の隠れ無きか。其の中の分別功德品の四信と五品とは法華を修行するの大要、在世滅後の龜鏡なり。

荆溪云はく「一念信解とは即ち是本門立行の首めなり」云云。其の中に現在の四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の初隨喜と、此の二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋、十方三世の諸仏の出門なり。天台・妙樂の二の聖賢此の二処の位を定むるに三つの積有り。所謂或は相似十信鉄輪の位、或は觀行五品の初品の位、未断見思、或は名字即の位なり。止觀に其の不定を会して云はく「仏意知り難し機に赴きて異説す、此を借りて開解せば何ぞ勞はしく苦ろに諍はん」云云等。

予が意に云はく、三積の中に名字即は經文に叶ふか。滅後の五品の初めの一品を説いて云はく「而も毀<sup>き</sup>せせずして隨喜の心を起こす」と。若し此の文相似と五品とに渡らば、而不毀<sup>に</sup>の言は便ならざるか。就中<sup>なか</sup>中<sup>ちゆう</sup>寿<sup>じゆう</sup>量<sup>りやう</sup>品<sup>ひん</sup>の失<sup>な</sup>心<sup>しん</sup>・不<sup>ふ</sup>失<sup>し</sup>心<sup>しん</sup>等は皆名字即なり。涅槃經に「若<sup>に</sup>信<sup>やく</sup>若<sup>に</sup>不<sup>ふ</sup>信<sup>しん</sup>、乃至<sup>ない</sup>熙<sup>し</sup>連<sup>れん</sup>」とあり、之を勸へよ。又一念信解の四字の中の信の一字は四信の初めに居し、解の一字は後に奪はるゝ故なり。若し爾らば無解有信は四信の初位に当たる。經に第二信を説いて云はく「略<sup>りやく</sup>解<sup>げ</sup>言<sup>ごん</sup>趣<sup>しゆ</sup>」云云。記の九に云はく「唯初信を除く、解無きが故に」と。随つて次下の隨喜品に至つて上の初隨喜を重ねて之を分明にす。五十人<sup>これ</sup>是<sup>てんでん</sup>皆<sup>これ</sup>展<sup>てんでん</sup>轉<sup>てんでん</sup>劣<sup>てんでん</sup>なり。第五十人<sup>これ</sup>に至つて二の積有り。一には謂はく、第五十人は初隨喜の内なり。二には謂はく、第五十人は初隨喜の外なりと云ふは名字即なり。「教<sup>いよいよ</sup>弥<sup>いよいよ</sup>実<sup>いよいよ</sup>なれば位<sup>いよいよ</sup>弥<sup>いよいよ</sup>下<sup>いよいよ</sup>し」と云ふ積は此の意なり。四味三教より円教は機を撰し、爾前の円教より法華經は機を撰し、迹門より本門は機を尽くすなり。「教弥実位弥下」の六

字に心を留めて案ずべし。

問ふ、末法に入って初心の行者必ず円の三学を具するや不<sup>いな</sup>や。答へて曰く、此の義大事たり。故に經文を勸へ出だして貴辺に送付す。所謂五品の初・二・三品には、仏正しく戒<sup>かいじょう</sup>定の二法を制止して一向に慧の一分に限る。慧又堪へざれば信を以て慧に代ふ。信の一字を詮と為す。不信<sup>いっせんだいほうぼう</sup>は一闡提謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり。天台云はく「若し相似の益<sup>きやくしやう</sup>は隔生すれども忘れず、名字觀行の益は隔生すれば即ち忘る。或は忘れざるも有り、忘るゝ者も若し知識<sup>あ</sup>に値へば宿善<sup>かえ</sup>還つて生ず。若し悪友に値へば則ち本心を失ふ」云云。恐らくは中古の天台宗<sup>じかく</sup>の慈覺・智証<sup>ちしやう</sup>の兩大師も天台・傳教の善知識に違背<sup>いはい</sup>して、心、無畏・不空<sup>むい</sup>等の悪友<sup>ふくう</sup>に遷<sup>うつ</sup>れり。末代の学者、慧心の往生要集の序<sup>おうわく</sup>に誑惑せられて法華の本心を失ひ、弥陀の権門に入る。退大取小の者なり。過去を以て之<sup>おも</sup>を惟ふに、未来無数劫を経て三惡道に処せん。若し悪友に値へば則ち本心を失ふとは是なり。問うて曰く、其の証如何。答へて曰く、止觀第六に云はく「前教に其の位を高うする所以<sup>ゆえん</sup>は方便の説なればなり、円教の位<sup>ひく</sup>下きは眞實の説なればなり」と。弘決に云はく「前教といふより下は正しく権實を判ず。教<sup>いよいよ</sup>彌實なれば位<sup>いよいよひく</sup>彌下く、教<sup>いよいよ</sup>彌權なれば位<sup>いよいよ</sup>彌高き故に」と。又記の九に云はく「位を判ずることをいはゞ觀境<sup>いよいよ</sup>彌深く実位<sup>いよいよひく</sup>彌下きを顯はず」云云。他宗<sup>しばら</sup>は且く之を置く、天台一門の学者等何ぞ実位<sup>さしお</sup>彌下の釈<sup>さしお</sup>を閣いて慧心僧都の筆を用ふるや。畏・智・空と覺・証との事は追つて之を習へ。大事なり大事なり、一闡<sup>えんぶだい</sup>浮提第一の大事なり。心有らん人は聞いて後に我<sup>うと</sup>を外め。

問うて云はく、末代初心の行者に何物をか制止するや。答へて曰く、檀戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華經と稱せしむるを、一念<sup>しんげしよづいき</sup>信解初隨喜の気分<sup>けぶん</sup>と為すなり。是則ち此の經の本意なり。疑つて云はく、此の義未だ見聞せず。心を驚かし耳を迷はず。明らかに証文を引いて請<sup>ねんご</sup>ふ苦<sup>ねんご</sup>ろに之を示せ。答へて曰く、經に云はく「我が為<sup>また</sup>に復寺塔<sup>また</sup>を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧を供養することを須<sup>もち</sup>ひず」と。此の經文は明らかに初心<sup>だんかい</sup>の行者に檀戒等の五度を制止する文なり。疑つて云はく、汝が引く所の經文は但寺塔と衆僧<sup>ばか</sup>と計りを制止して未だ諸の戒等に及ばざるか。答へて曰く、初を挙げて後を略す。問うて曰く、何を以て之を知らん。答へて曰く、次下の第四品の經文に云はく「況んや復人有<sup>よ</sup>つて能く是の經を持って兼ねて布施<sup>ふせ</sup>・持戒<sup>じかい</sup>等を行ぜんをや」云云。經文分明に初・二・三品の人には檀戒等の五度を制止し、第四品に至つて始めて之を許す。後に許すを以て知んぬ、初めに制することを。問うて曰く、經文一往相似<sup>はたまたしよしゃく</sup>たり、將又疏<sup>はたまたしよしゃく</sup>釈有りや。答へて曰く、汝が尋ぬる所の釈とは月氏の四依の論か、將又漢土日本の人師の

書か。本を捨て、末を尋ね、体を離れて影を求め、源を忘れて流れを貴び、分明なる經文を闇いて論釈を請ひ尋ぬ。本經に相違する末積有らば本經を捨て、末積に付くべきか。然りと雖も好みに随つて之を示さん。文句の九に云はく「初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨げんことを畏る。直ちに専ら此の經を持つは即ち上供養なり。事を廢して理を存するは所益弘多なり」と。此の釈に縁と云ふは五度なり。初心の者が兼ねて五度を行ずれば正業の信を妨ぐるなり。譬へば小船に財を積んで海を渡るに財と俱に没するが如し。「直專持此經」と云ふは一經に亘るに非ず。専ら題目を持ちて余文を雜へず、尚一經の読誦だも許さず、何に況んや五度をや。「廢事存理」と云ふは戒等の事を捨て、題目の理を専らにす云云。「所益弘多」とは初心の者が諸行と題目と並べ行ずれば所益全く失ふと云云。文句に云はく「問ふ、若し爾らば經を持つは即ち是第一義の戒なり。何が故ぞ復能く戒を持つ者と言ふや。答ふ、此は初品を明かす、後を以て難を作すべからず」等云云。当世の学者此の釈を見ずして、末代の愚人を以て南岳・天台の二聖に同ず。誤りの中の誤りなり。妙樂重ねて之を明かして云はく「問ふ、若し爾らば、若し事の塔及び色身の骨を須ひずば亦事の戒を持つことを須ひざるべし。乃至事の僧を供養することを須ひざるや」等云云。傳教大師云はく「二百五十戒 忽ち捨て畢んぬ」と。唯教大師一人に限るに非ず、鑑眞の弟子如宝・道忠並びに七大寺等一同に捨て了んぬ。又教大師未來を誠めて云はく「末法の中に持戒の者有らば是怪異なり。市に虎有るが如し。此誰か信ずべき」云云。

問ふ、汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せずして唯題目許りを唱へしむるや。答へて曰く、日本の二字に六十六国の人畜財を擷尽して一つも残さず。月氏の兩字に豈七十箇国無からんや。妙樂云はく「略して經題を挙ぐるに玄に一部を収む」と。又云はく「略して界如を挙ぐるに具さに三千を擷す」と。文殊師利菩薩・阿難尊者・三會八年の間の仏語之を挙げて妙法蓮華經と題し、次下に領解して云はく「如是我聞」云云。問ふ、其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱へて解義の功德を具するや不や。答ふ、小兒乳を含むに其の味を知らずとも自然に身を益す。耆婆が妙藥誰か弁へて之を服せん。水心無けれども火を消し火物を焼く、豈覺あらんや。竜樹・天台皆此の意なり。重ねて示すべし。問ふ、何が故ぞ題目に万法を含むるや。答ふ、章安云はく「蓋し序王とは經の玄意を叙す。經の玄意は文の心を述す。文の心は迹本に過ぎたるは莫し」と。妙樂云はく「法華の文の心を出だして諸經の所以を弁す」云云。濁水心無けれども月を得て自ら清めり。草木雨を得て豈覺有つて花さくならんや。妙法蓮華經の五字は經文に非ず、其の

義に非ず、唯一部の意ならくのみ。初心の行者は其の心を知らざれども、而も之を行ずるに自然に意に当たるなり。

問ふ、汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と称する其の位如何。答ふ、此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず、将又真言等の諸宗の元祖・畏・嚴・恩・蔵・宣・摩・導等に勝すること百千万億倍なり。請ふ、国中の諸人我が末弟等を軽んずること勿れ。進んで過去を尋ぬれば八十万億劫供養せし大菩薩なり。豈熙連一恒の者に非ずや。退いて未来を論ずれば、八十年の布施に超過して五十の功德を備ふべし。天子の襁褓に纏はれ大竜の始めて生ぜるが如し。蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ。妙樂の云はく「若し惱乱する者は頭七分に破れ供養すること有らん者は福十号に過ぐ」と。優陀延王は寶豆盧尊者を蔑如して七年の内に身を喪失し、相州は日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇へり。經に云はく「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出ださん。若しは実にもあれ若しは不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん。乃至諸悪重病あるべし」と。又云はく「当に世々に眼なかるべし」等云云。明心と円智とは現に白癩を得、道阿弥は無眼の者と成りぬ、国中の疫病は頭破七分なり。罰を以て徳を惟ふに我が門人等は福過十号疑ひ無き者なり。

夫人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りしより以来、桓武の御宇に至るまで二十代二百余年の間、六宗有りと雖も仏法未だ定まらず。爰に延暦年中に一の聖人あって此の国に出現せり。所謂伝教大師是なり。此の人先より弘通する六宗を糾明し、七寺を弟子と為して終に叡山を建て、本寺と為し、諸寺を取りて末寺と為す。日本の仏法唯一門なり。王法も二に非ず。法定まり国清めり。其の功を論ぜば源已今当の文より出でたり。其の後弘法・慈覚・智証の三大師事を漢土に寄せて大日の三部は法華經に勝ると謂ひ、剩へ教大師の削る所の真言宗の宗の一字之を副へて八宗と云云。三人一同に勅宣を申し下して日本に弘通し、寺毎に法華經の義を破る。是偏に已今当の文を破らんとして釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ。然して後仏法漸く廃れ、王法次第に衰へ、天照太神・正八幡等の久住の守護神は力を失ひ、梵・帝・四天は国を去つて已に亡国と成らんとす。情有らん人誰か傷差ざらんや。所詮三大師の邪法の興る所は所謂東寺と叡山の総持院と園城寺との三所なり。禁止せずんば国土の滅亡と衆生の惡道と疑ひ無き者か。予粗此の旨を勸へ、国主に示すと雖も敢へて叙用無し。悲しむべし悲しむべし。